

第8回北勢線の魅力を探る ～春うらら！東員の名花と城跡～

開催日 2007年4月15日（日）

参加者 125名（内子ども7名）

協力 六把野新田自治会、鳥取自治会、朗読ひばりの会

伊藤強さん、山口一成さん、藤田倫夫さん、水谷徹夫さん

六把野新田

集合場所の穴太駅は昨年の9月に改築オープンした。駅から六把野新田まで歩く。六把野新田という地名は一反あたりの年貢が六把であったことに由来して名付けられたらしいと、六把野新田の自治会長の伊藤強さんが話された。密集した集落の中ほどに六把野道場とよばれる建物がある。浄土真宗本願寺派の説教所である。庭先に「宮崎俊造先生碑」がある。彼はこの地で幕末から明治にかけて、読書や算術を教えた教育者で、明治34年（1901）に碑が建てられた。

こんもりとした森が、この地の鎮守である六把野御厨神明社である。拝殿前の石碑の由緒によれば、寛永14年（1637）2月に、六把野井水を開かんとして皇大神宮に祈願し、一万度の大麻を受けてこの豊岡の地に氏神として奉られた、とある。拝殿左側の建物には古くから伝わる六把野獅子舞の資料が陳列してあり、開けて見せていただいた。六把野獅子舞は春・秋の大祭に奉納され、平成11年（1999）に東員町の無形民俗文化財第1号に指定された。拝殿右側の建物は石取祭の祭車庫で、この祭車は桑名の福江町から譲り受けたものである。石取祭は8月15日に行なわれる。近くに「顔なし地蔵」がある。

城山

出発から1時間ほど歩き、山田溜公園の横を通り過ぎて、東員の名花のひとつ「トウインヤエヤマザクラ」に着いた。今まさに満開で、私たちを迎えてくれた。ここから東員町随一の郷土史家・山口一成さんの解説が始まる。珪化木を探していた大学の先生が、たまたまこのサクラを見つけ、コノハナサクラの一種で、非常に珍しいから保存するように指導された。平成8年



六把野獅子舞の資料



石取祭の祭車

(1996) 4月 17 日に町指定天然記念物となった。

城山の住宅団地の中にある小公園に「山田城の跡」と書かれた石碑がある。規模の大きな城であり、天正元年（1573）織田信長勢の攻略により滅亡してと伝えられる。一帯が住宅団地に開発されることになり、全面的に発掘調査されて、2棟の建物、井戸などが見つかった。現在は開発されて遺構は失われている。

山田溜公園にあるイヌナシ自生地では、白い花が2, 3輪残っている程度で、瑞々しい若葉になっていた。花の代わりにウグイスの高らかな歓迎の声が私たちを迎えてくれた。イヌナシの横にある池は上溜の一部であるが、スイレンが植えられている。夏になればモネの絵を思わせるような風景になるに違いない。



トウインヤエヤマザクラ

鳥取

次の目的の鳥取神社までの途中の田圃の中に「笹尾城主青木駿河守平安豊之塚」と書いた石碑がある。山田（笹尾）城主の墓と伝えられ、昭和 52 年（1977）の耕地整理以前には塚があり、その木や草を刈り取ったら「たたり」があると言われた。耕地整理の結果、一部の土地を残して田圃になった。

鳥取神社横の広場にあるイヌナシの大木に到着。このイヌナシは満開を過ぎたけれど、まだ花もかなり残っている。地元の藤田倫夫さんと、このイヌナシの保護に努められておられる水谷徹夫さんから詳しい説明を聞く。高さ 10m の頂上から地上すれすれまで白い花が咲いたが、近年に裾の方の枝を切ってしまう、昔ほどの景観がなくなると。風が吹くと一晩で花は落ちて、下は白い絨緞を敷いたようになる。そんな様子の写真なども見せてもらった。

最後は、隣にある鳥取集落センターをお借りして、紙芝居の公演となったところで、建物がミシミシと揺れだす。大きな地震だが、すぐに収まった。東員町のボランティア・グループ「朗読ひばりの会」による手作りの紙芝居で、「顔なし地蔵」を上演していただく。目や鼻を人間や蛇にやっつけて、顔がなくなったお地蔵さんの話である。本当に熱心な語りで、思わず引き込まれる。

これで一応解散となり、多くの方はこの場所でお弁当を食べた。鳥取忠魂碑、鳥取塚、楚里見坂道標（文化 14 年＝1817 建）などを見て東員駅に着いた。



鳥取神社横のイヌナシ